

◎沈黙する熱帯林—現場からの報告— 小林繁男編 A6版 395 pp. 東洋書店, 東京 1992. 11. 15 刊, 定価 3,500 円税込み

今, 熱帯林はその存在を主張すべきときで, 沈黙してはいけないときであるとみんなが思っている。それなのにこのような表題を付けた理由を編者は次のように書いている。即ち, 国際会議でもマスコミでも大きく取り上げられている熱帯林問題も, 「私たちが熱帯林の重要性について私たちの問題として考えてゆかない限り, 話題が冷めれば熱帯林は沈黙してしまう」からであり, 多様な重要さを包含しているとはいっても, 自分からは何も語らない熱帯林はややもするとグローバルな環境保全問題の一部として埋もれてしまいかねないので, これを特別なものとせず「私たちの周りにある森林と同じように長期的に見てゆくことなしには, 熱帯林はまたもや沈黙してしまう」からだというわけである。そういう意識を持って「熱帯林研究」に現在進行形で携わっている研究者が 13 人, 自分の目でみて足で集めた資料を基に, 写真を豊富に使って現地からの報告を行っている。

熱帯の環境と熱帯林の実際のすがた, そこに住む人々の暮しぶりや彼らの巧みな森林の利用法, 植物相や動物相の豊かさと興味ある挙動や適応の仕方, 問題となっている熱帯林消滅のメカニズムと実際, 熱帯林回復の現状と問題点, 保全のための将来戦略が, 執筆者それぞれの研究と体験を通じて論ぜられている。佐々木現東大教授に始まる森林総合研究所熱帯林研究グループの成果だけに, お互いの研究内容を知った上で連携の取れた報告としている, 特に人間生活との係わりに力点をおいて概括し, あるいは例証し, 詳細に紹介しているのが本書の特長である。

日本人が国際協力事業団を始めとする様々な場で携わってきた, 熱帯林回復の試みの現状報告も盛り込まれており, 文章も平易で読みやすいように配慮されている。熱帯林問題の現況やこれまで取り組んできた事業の成果を知り, 今後の係わり方を考える上で格好な書である。力作であり, 執筆者の熱意が伝わってくるだけに, 一部ではあるが, 用語の不統一や, 撮影地の説明不足, 不鮮明な写真などがみられるのが惜まれる。(桜井尚武)